

男女平等教育の視点から考察した戦後家庭科教育実践の教授学的研究
 鳥取大教育○田結庄順子 福岡教育大 柳昌子 宮城教育大 中屋紀子 静
 岡大教育 吉原崇恵 お茶の水女大、牧野カツコ 鳥取大教育 西丸理恵

<目的> 従来の家庭科教育における歴史研究は、ともすれば学習指導要領の各年版の解説や教科書や指導書の歴史を叙述したものが主流で、教育実践が依拠した教科理論や子どもにつけようとした学力、それを保障する具体的な教材、その授業の方法など、教授学の立場からのアプローチはそう多くはない。そこで、男女平等教育の視点で、戦後の家庭科教育実践の授業を分析し、不足していた点を明確にしたい。

<方法> 1946年度から93年度までの47年間に公刊された月刊雑誌等に収録された授業記録を、教授学でいう「授業を構成する4つのレベル(教育内容、教材、教授行為、学習者)」(藤岡信勝 1989年)に対応して抽出、分析した。

<結果> 抽出された授業実践記録は小学校、中学校、高等学校合わせて4,164事例であった。1940年代は21例、50年代505例、60年代555例、70年代1021例、80年代1450例、90～93年は611例であった。領域別×年代別でみると、被服領域の減少、食物、家族関係、保育、住居領域の増加がみられた。教材の編成枠組みをみると、全体では、「教科書準拠」は40.5%、「独自教材による自主編成」は27.9%であった。特に80年代以降は逆転し、25.8%、43.4%であった。教師の研究態度も80年代には「開発追求型」が60.2%と多い。授業後の子どもの変容の客観化は、全体の19.4%が評価基準が明確であった。